

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

庄司久恵

まつぶさに眺めてかなし月こそは全またき裸身と思ひいたりぬ

水原 紫苑

水原紫苑の第一歌集『びあんか』（一九九八年刊）所収。

先日の夜、この短歌を思い浮かべなが満月を仰いだ。煌々と照りながら、何故か寒そうな月の孤独な存在があった。「二十代の作品である。心がひりひりと痛かった夜、帰り道に月を眺めると、月も満身の痛みに耐えながら輝いているように見えた」と記していた作者の心を想ったのである。

月が裸身であるという発見が意表をつく。光を浴びてさらされている羞しさ、美しさを二句切れの悲しみの声によって哀切に響かせている。「まつぶさに」と切迫した視線と主情は二句までに凝縮され、「月こそは」に強く云い直すことによって転換されてゆく。この歌はシンプルな独白の形をとって、月を眺めて哀しむ作者の独白と息遣いが静かに奥底から響き、透明感をたたえながら月と呼応する存在の痛みが漂う。「全またき裸身」をさらす月の哀しみは身体・エロス・寒さ・痛々しさ・羞恥・等作者の痛みでもある。伝統的な主題である月は、古来から多くの名歌が読まれて来た。この歌は現代の新しい月の歌だと思う。身体感を与えられた月との分け合ったような存在感の悲しみを聞くのである。水原紫苑の歌はいつもまっすぐに何かを指示しているのを感じる。

卷頭言

富士正晴の「わが書斎兼客室兼寢室の前に、半坪ばかりの細長い池がある。」で始まる「蛙の声」と言う文章に「数年前、ラジオの録音にきた放送局の人が蛙の多さと、蛙の声にあきれた。これから蛙の声がうる時はここへ来ればいいわけですかねえといった。いっただけで取りには来ないが、そういうたいほど、夏蛙の鳴声は猛烈である。」とある。四十年前の大坂府茨木市の自宅での事。ちなみにこの文章は「三島由紀夫が蛙の声を聞いてあれは何の声かとたずねた話は何かあわれである。」で終わる。

四十年後の鴨川の私の住む家の周囲で田植が始まる四月頃からこの猛烈な蛙の声は終夜止む事は無い。しかし稲刈りが終る八月の末にはびたりと止む。いったいあの沢山の蛙はどこへ行ってしまったのか。土に潜って冬眠してしまったのだろうか。代って一斉に虫が鳴き出す。今までどこに居たのかと思う程に色々な虫の音がかまびすしい。そして見上げると空は深く澄んで、月も星も輝きを増している。日中の暑さにごんごんして夏を引き摺っている人間を尻目に季節は瞬時に見事な引き継ぎを終えてしまった。

田舎暮らしを始めて三年目、まだまだ地球は豊かな星である事を実感する。この豊かな星を私達は次世代に残して行くべき責任を持つ。地球温暖化を食い止める為、先進国と言われる国に住む私達は、真剣に便利である事について考える必要があるのではあるまいか。全ては便利を求め人間の欲望から生じた科学や文明の進歩がもたらしたものであるからだ。そしてその欲望は人の心までも破壊している。九月の初め、銀座を歩きながら高層ビルの谷間で私は悪寒を禁じ得なかった。

(高崎)

太陽の舟 目次

三十一巻 十月号(通巻二九八号)

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

庄司 久恵

卷頭言

高崎 邦彦

二十五首詠

中村 陽子

阿部正路論(第九十六回)

須藤 宏明

歌誌散見(第七十二回)

豊泉 豪

作品 I

相羽 照代 他

八月批評(作品 I)

山名 恒子

合 評(座談会)

岡部千代松

選者十首

岩橋千代子・武田 節子

秀歌抜芳(二九六号)

森本 元昭・上田やい子

作品 II

高崎 邦彦

文法講座(十)

土屋 道子 他

作歌の目・作歌の技法(第五十七回)

奥田 清

歌帖余白座(七十)

三木 勝

連歌 秋・限りなき空

松岡 三夫

歌会・支部報告 他

山田(紀)・川村・松岡

編集後記

山田(紀)・川村・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト阿部正冬

20 39 38 36 35 26 22 21 20 18 17 16 6 5 4 2 1

夏寒く

中村陽子

鱈ぜいご釣りたて鱈の鋭くて潮の香りをたたみこみみる
腹の内整然として卵を抱く鱈のまなこの深く光れり
父の米寿祝ふと娘の連れくれし鎌倉海辺の小さきレストラン
渚近く白浪崩るる穏やかさ水平線のけぶる水無月
外出の少なくなりし夫の目に海面開けて明るさを増す
逗子の地に捨てし青春ぼつぽつと海原見つつ夫の語りぬ
半年の繰上げ卒業国の盾と夫の向ひし海軍入隊
民家に紛れ潜水艦探知器研究に夫携はるたずさ即製軍人
出撃はいつやも知れず下野より覚悟の面会姑の思ひは
息子二人征きたる姑の憂情を晩年の述懐涙まじれり

何しかも乗るべき軍艦もはや無く思惟の他なる終戦迎ふ

「逗子のどのあたりで……」「忘れた」と会話短かく海に放てり

若者の熱^{ほて}る思ひの如何でありし 澱めくものに言葉少なし

風兆し膨らみてくる波の畝 水漬く屍を洗ひし日ありや

海神^{わたつみ}に夫召さるなく相逢ふて娘とのテーブル何をか言はむ

二つ三つ漁船ヨットの遠く浮き波追ふ児等に平和な眞昼

戦時下の父の転勤東京へ飢餓の暮しに母のたじろぐ

掌ほどの鱈と大根六人の二日分とぞ配給なりし

着物包み歩いて乞ひて買出しに四人の子あれば母立ち上がりたり

終戦の直後の疲弊江の島に若布を分けて貰ひし記憶

買出しの満員電車に不憫とて吾を抱きしめし母の不憫さ

悲しみも異存も言へざる銃後とふ母達おみなの方の切なさ

命産む尊き地球に共に居て争ふことの人の忌^ゆ忌^ゆしき

夏寒くおろかな歴史を拒みをり娘に歩ませてならぬ道程

営営と発展築きし人間の叡知平和へと信じ逝きたし

阿部正路論

須藤 宏明

上総の「一宮館」を定宿にした芥川龍之介の小説を支えたのは、芥川の寸鉄の言葉の鋭さと、それら組み合わせる言葉の繋ぎの巧みさにある。卓越した短編小説家である所以は、ここにある。それでは、この寸鉄の言葉の巧みさは、何に起因するのか。それは、彼の短詩型文学に対する造詣の深さと、同時代の歌壇に対する鋭敏な反応にある。芥川と短歌の結びつきに関して、阿部正路は、

芥川は、短歌や旋頭歌を作ったし、とりわけ、「アララギ」派の、島木赤彦や斎藤茂吉や土屋文明に、なみならぬ関心を寄せつづけた。『和歌文学発生史論』楓桜社・昭和五十二年・二七三頁）

と解説し、芥川は、土屋文明に荒御魂と和御魂が同時に内在することを見抜いていたと指摘する。これを踏まえて、

土屋文明の歌の魅力は、実は、この荒御魂と和御魂の不思議な混淆の中にある。人は多く、文明の、荒御魂に押しつぶされてしまったかのような和御魂に気づくことはなく、文明の荒御魂の面のみに執着する。しかし、さすがに芥川龍之介は、みごとに土屋文明の和御魂の在りよ

うを正しく指摘していたのだった。（同前）

と説き、これを「芥川龍之介の〈深い眼〉であった」と言う。文明の荒御魂と和御魂の相乗を見抜いた芥川の〈深い眼〉も秀逸であるが、それを洞見した阿部も慧眼である。阿部のこの慧眼は、常に、短歌と小説を文学として巨視的に捉えようとしていた文学姿勢に保たれている。細分化された文学研究方法にのみ偏っているのは、文学の本質は見えない。散文と韻文は両輪である。脱輪状態では小説も短歌も成り立ち得ないことを、芥川も阿部も重視している。

芥川と文明の繋がりは、東京大学の学内同人誌の第三次の「新思潮」にある。第一次は小山内薫が編集し、第二次では谷崎潤一郎が文壇デビューし、第三次は芥川、文明、菊池寛、久米正雄などが携わった。川端康成は第六次出身である。このような関係を、阿部は、芥川にとって「土屋文明は同時代のかげがえのない同行者であったし、友人であったのである。」と述べる。このような関係の中で、芥川は短詩型を通し、寸鉄の言葉を鍛錬していったのであろう。芥川が文明の短歌で注目するのは、「落葉の中のりんどうの花」「植ならぶわさび」の花に潜む和御魂である。これは、高崎邦彦が「太陽の舟」平成二十一年九月号の「巻頭言」で言う「目に見えぬものを見よ」「路傍の小さな花」という捉え方である。芥川は、路傍の小さな花を見る文明を見ていたのだ。ここに和御魂がある。売れ残ったもの、見逃されてしまっている存在を見ることが、本質を見極めることになるという和御魂を、阿部正路は重要視している。

歌誌散見 第七十二回

豊泉 豪

「くれない」②

沖繩戦の戦闘が終結した六月二三日（一九四五年）を、沖繩県では慰霊の日と制定している。この日、紅短歌会がある糸満市では、摩文仁の平和祈念公園において、沖繩全戦没者追悼式が行なわれる。「くれない」は、反戦平和のメッセージを強く打ち出した歌誌であり、とくに夏の時期には沖繩戦の傷痕や、米軍基地問題などを背景とした作品が多く見られる。二〇〇九年七月号と八月号より短歌作品を鑑賞する。

・泥にまみれ血にまみれ乙女ら砲弾に果てたりひゅんひゅん
風泣く六月 玉城 寛子

〈島の喪の月六月に五首〉という詞書がある。痛ましい過去の事実と、それに寄せる作者の気持ち、大幅な字余りに表れている。「ひゅんひゅん」は風の、そして泥と血にまみれて死んだ乙女らの泣き声であり、また彼女らを殺した砲弾の音でもあろうか。擬音語によって悲愴感が高められている。
・思い出しました消すごとく目を閉じて集団死を語る金城翁は

瀬良垣克夫

目を閉じて集団自決を語る老人の表情が、昔を思い出そうと努めているようにも、また無惨な過去を記憶から消そうとしているようにも見える。初句と第二句の表現にやや難を感

じるが、一首の伝えようとしては十分に理解できる。思い出すのがつらい、いっそ忘れてしまいたい過去であればこそ、同じ過ちを繰り返さないために「金城翁」は語り続けるのだろう。その気持ちを汲み取った作である。

・突風の過ぎて明るむ病院のめぐりに自転車に死に体あまた
井門 きみ

「死に体」という表現が巧みである。並んだ自転車が将棋倒しに半ば倒れており、そのうちのどの一台に手をかけても、前後の自転車もまた悉く倒れてしまうような状態なのである。強風の後の情景をうまく表現している。またこの言葉には、病んだ人々、ひいては人間存在そのものが暗示され、あるいは現代の社会や医学に対する批判的な視点が隠されているのかも知れない。同じ一連の「幾度も長き電話のある日なり噤止まらぬ言ひ分けもせず」もおもしろい作品だと思った。
・雨上がり気の澄む真昼野の果てに海深くして死者の響めき
金城 秀子

「摩文仁野」八首中の作である。摩文仁は沖繩戦最後の地であり、国内で唯一地上戦が行われた場所であるという。この近くの断崖（ギーザバンタ）から追い詰められた多くの住民が投身し、米軍はここをスーサイドクリフ＝自殺の断崖と呼んだ。一带は景勝の地で、現在は行楽客で賑わうというが、海深くにはなお多くの死者が沈んでおり、作者にはその苦しい呻き声が聞こえるのだろう。仲村致彦の作「岩石が刃を研ぎ澄ます島の果てギーザバンタに吠える荒波」もあった。

八月批評（作品Ⅰ）

山名 恒子

・吾の死後は解体される住宅も夫とプランを練りし日のあり

吉岡悠紀子

夫在りし日の喜びも、解体の悲しみも言わず、いとも淡々と詠んでおられるのは、この世の無常も有情も承知の上だから。自分のことには悟りを得て、友の上には嘆きも惑いも只々自分の哀しみとして吞んでしまわれる、得難い読み人です。

・真っ黒に予定を埋めし切なさもひたすら老いて荷風の日乗

生稲 進

かつては仕事の予定で埋まっていたノートも、今では荷風の断陽亭日乗のように、日記帳になってしまったと詠まれる。切なさも、質を変えて受け入れざるを得ない現実には、誰もが戸惑うのだと思います。荷風の日乗なら喝采です。

・日時計の針の翳りの又映ゆる空ゆく雲のおもむくままに

石塚 立子

雲のおもむくままに日時計の針が照り翳りすると詠みつつ、なかなかそのように自然体ではられない人間の憧れも詠み込まれているように思えました。

・歌一つ纏まりてうれし自画像の亡夫にわが言ふサンキュー
ペリーマツチ

・生きる意味わからぬと泣く吾が友を帰して後に吾も泣きたり
井上萬里子

太陽の舟と題された歌群の中の二首。歌の出来上がった喜びと安堵を、軽やかにサンキューペリーマツチと、それもご主人の描かれたご主人の像へ話しかけられるという、作者の笑顔が見えるようです。そしてまた、友の言葉に深い同情を寄せ、自らを省みて独り涙する繊細な人でもあるのです。

・減反で道路の脇は葦繁る遊ばせて金これが不道理

大橋 俊弘

五十年ぶり田植してと題された農業の現状を憂う七首のうちから。これこそが道理に合わないことなんだと、もっともって怒って欲しいと思うのです。

・螢舞ふ叢途切れせせらぎに月の光はさらさらゆれる

緒方 善丸

昨年のお美濃太田での全国大会の際、螢の乱舞を見せていたできました。この歌から、あの宵の夢まぼろしのような風景が一瞬にして甦ってきました。

・湾岸の映像のごと撃ちまくる曳弾曳光下呂の夜空に

酒向 一次

花火の歌です。戦争を実際に経験された人の思い様がこれほど凄まじいことに胸が痛くなります。ヴェトナム帰りの米兵がいつまでも悪夢から抜け出せない現実も他人事ではないと思いました。いつか花火が花火として見られますように。

・合歓の木の葉を閉ざしゆくたそがれにしづかに星のひかり
増しくる
末次 房江

安らかで心地よい歌に、ほっと肩の荷をおろしました。

八月批評（作品Ⅱ）

岡部千代松

・聞かぬふり見ぬふり次第に多くなり老いゆく心ときをり寂し
塚本 正子

次第に他人事に関心が薄くなるのは、加齢による体力、気力の衰えからでしょう。老いれば万事控えめがよろしいのではないのでしょうか。とはいえ、寂しくなる作者の気持ちもよく分かります。

・七人中五人は携帯みつめるぬ連休初日の駅のホームに

照山 好子

七人中五人と具体的数字で言い切ったところが面白いと思います。最近では、話すより見つめている携帯が多いと感じます。歌全体が具象的で、その雰囲気をよく醸し出している歌と思います。

・家族連れと置いて居りしその四人信号変わりて散りて行きたり
中村 武光

四人は、年齢、性別などから家族連れと見紛う様子だったのでしよう。信号変わりの際の意外性をうまく捉えた面白い歌と感心しました。ふと、「仮面の家族」を連想しました。

・目に見えぬ程に小さき虫止りふっと息かけ放ち失せたり

二反田 實

どんな小さなものにも生命があります。無用な殺生はしたくないものです。この歌は、身近に見つけた小さな虫への優

しさと気配りを感じました。「ふっと息かけ」が効果的だと思います。

・高齢者背筋伸ばして歩こうよ整体医院また開業す

宮島マツエ

高齢者への自覚を呼び掛けたユニークな歌と思いました。最近、整体や、整骨院などが目立ちます。また、高齢者の通院も多いと聞きます。お互い自助努力で健康第一を心掛けたいものです。

・伸びすぎた枝を払いし翌日の大雨木々を隈なく洗う

宮原喜美子

剪定の翌日に大雨とはグッドタイミングでした。隈なく洗うもびつたしの表現で、上手いと思います。拝読後、シャワーを浴びたような爽快な気分になりました。

・デパートのわずかな段差につまずきぬ意識をしつつ足高くなる
八代 陽子

加齢によりよく経験することです。思ったほど足が上がっていなかったのでしょうか。日常の身近な出来事を上手く詠っています。ご指摘のように意識して行動したいものです。

・帰り行く息子の車は夜の町の角を曲れり じっと見送る

山田 紀子

何歳になっても、親から見れば子供は子供です。夜間、車を運転して帰る息子さんを気遣う気持ちがよく伝わってきます。角を曲がっても、しばらくは見送っている様子が目に浮かぶようです。

合評

座談会

E 合評を始めます。今回は八月号から四首を選んで行います。最初は水戸支部の近藤リイ会員の

さりげなく触れて別れし友の手のぬくもりいだき夕べの電車に です。如何でしょうか。

Q なに気なく、さらっと触れた親しい友達の手のぬくもりと感触を大切に胸に抱いて、夕方の電車に乗った作者の懐かしさが素直に詠まれていて、しみじみとした情感が伝わってきました。

W 私は結句の「電車に」が気になる。

H そうですね。破調でもあるし。

G それだったら、下句の「き」と「に」を取り「ぬくもりいだく夕べの電車」にしてみてもどうでしょうか。

B 「き」は「いだきて」の「て」が省略されていると考えられるので変えられない。「いだく」では別れた後の継続が無くなる。ここは結句の「に」を取れば良い。

H さりげなく触れただけなのに、思いがけずぬくもりが伝わって、手にも心にも残っている、と詠んでいる。よほど親しい友達なんでしょう。

Q 作者の七首を読むと、同級生とありましたね。

W わざとらしく握手をして別れたのではなくて、明日につながるような感じのする歌と思う。

G そう、夕暮れどきの電車のなかの温かさも伝わってくるような歌。

E では、次は同じ水戸支部の菅谷孝子会員の「整える」何と響きの良い言葉体調整え家事にいそしむです。如何でしょうか。

Q 「整える」の言葉は「ととのえる」と調子のよい響きですし、整えることは気持のよい、人としても大切な行為で、家を整え、生活を整えようと、先ず体調を整え家事にいそしむいきいきとした作者の生への姿勢が立派だと思います。前向きでさわやか。「整える」がよく活かされた歌と思います。

H 小さな幸せに浸っているという感じがしました。健康的な歌だと思えます。

G 「整える」と「家事にいそしむ」は前向きな感じがして良いと思うけど、「何と響きの良い言葉」は主観が強すぎるような感じがする。ここに具象を持ってくるとよいと思う。

H それは難しいわ。

W 「整える」という語句を具体的な行為で表現する。例えば、夫の居ぬ間に掃除機をかける、とか。

G 「体調」を「体」に直し、平仮名にしてはどうですか。

B 体と体調は意味が違う。「体整え」では容姿を整える意味にも取られるので、やはり「体調」にしなくてはいけない。

H 「響き」も平仮名のほうが良いですね。

G 視覚にこだわるのなら、初句の「整える」も「響き」も平仮名で、「ととのえる」何とひびきの良い言葉体調整え家事にいそしむ というふうには。

B やはり二句、三句は主観を直截に表現しすぎています。たとえば「母が口ぐせ吾もまね」とか、なにか具象がほしいですね。

E この歌には余り類歌とか類想歌がなくて良いと思う。

E 三首目は、千葉支部の豊島英明会員の

「おくりびと」必ず門ありて輪廻転生「死」とは「門」なりを取り上げます。どなたからでもどうぞ。

H この歌はずいぶん、字足らずですね。

G そう、五文字が足りない。短歌は定型を守ることで、言葉を探す旅が始まるのだから。

W 二句目の「て」を取り、三句目として五文字をつけ加えてはどうか。人を見送るにしても、必ず門を通って行きま

Q むずかしい歌です。「おくりびと」の映画を観ての感想かとも思いましたが・・・この場合は、死を美しくしての送り人ばかりでなく、死者は肉親、知人に見送られて必ず死の

門を入れてゆく。「輪廻転生」は、死と生を繰り返すのとこのです。生れた子孫も又、死者を見送り、死の門に入る。という様なことを歌ってあるのでしょうか。

H 私も、「輪廻転生」を辞書で調べたら、いろいろ難しいことが書いてありましたね。

G 「輪廻転生」はこの歌の場合、大きすぎてその言葉に負けてしまう。下句をきちんと歌うべきだと思ふ。

E 作者は、三句目をうっかり忘れたのかもしいね。「おくりびと」必ず門より送るなり輪廻転生「死」とは「門」なりと直してみただけ、どうでしょう。

B やはりこれ程の字足らずではいけません。それと初句の「おくりびと」は何の意味でしょう。初句とそれ以下の言葉がつながりません。例えば「死にし人」とかなら下句はその

説明ということになるのですが。

W 作者はとも若いので今後に期待しましょう。

E 最後は、水戸支部の福地啓子会員の
朝霧に影の見えざる霞浦の湖ゆ砂利取り船の音の聞こゆる
です。どなたからでも。

Q 濃い朝霧で遠景も、何ひとつ影さえ見えない霞ヶ浦の湖に砂利取り船の音だけが聞こえてくるという。霧に呑まれたモノクロの中に立つ作者の静かな深々とした心情が詠み込まれた歌と思いました。

G 上句は情況説明がしっかり詠まれていて、一幅の絵を見ているような感じがした。ただ、三句目の「ゆ」はいらな

Q 朝って、時間的には何時頃でしょうか。

G 六時頃から八時頃だと思ふ。静かな朝の様子がよくわかるけど、聞こえてきたのは砂利取る音なのか、船のエンジン音なのか、ここがちょっと曖昧だ。

W 船のエンジンの音でしょう。砂利取る音なら「船の砂利取る」にしなければいけない。

H 音のみの世界を表現して上手い歌ですね。

G 船影が見えなくて、音しか聞こえない。だから、朝霧がいかに深いかかわかってくる。朝霧と霞浦の湖とがひびき合って、長塚節の「白埴の瓶こそ良けれ霧ながら朝は冷たき水波みにけり」を彷彿とさせる歌です。

B 霞浦をよく知っていて、自分の生活の一部としている。その中から選んだ風景。良いと思います。

E 本日はありがとうございます。

(記録・山田紀子)

選者 岩橋千代子

森に住むニングル(小人)鳴らす草笛の小川渡りて遠く響けり

渡辺 幸子

真っ黒に予定を埋めし切なさもひたすら老いて荷風の日乗

生稲 進

☆音もなく刻はびったり身に從きて運ぶ一步は生への一步

庄司 久恵

ものがたり幼子の胸に生れしか独り遊びのひとりの言葉

末次 房江

七十路にも燃ゆるものありときわ道牡丹の彩あはの妖艶に逢ふ

多久和玲子

長き冬耐へし大地に雑草は力をつくし春を織りつぐ

玉川 愛子

聞かぬふり見ぬふり次第に多くなり老いゆく心ときをり寂

塚本 正子

し
雨あがり月の光が青い闇年を取らない回転木馬

原田 寛

ラジオにて「日付変わって」とアナウンサー今日がはじま

る瞬間が好き
宮島マツエ

人が逝き赤子生れたはつなつに梅花うつぎの白く咲きそむ

村田 一江

選者 武田 節子

手話つけて北国の春唄ふたび帰ろかなといふ吾には郷な

き
浅見 時子

この世からストラされるその日迄歌詠む心保ちゆきたし

井上萬里子

連山に影を落して走る雲雄大な景を乗鞍に見る

遠藤 剛

☆旅の夜を心放ちて酌み交すぐらと酔ひたる飛驒の骨酒

木村百合子

梅雨じめる舗道に朱あかく散るざくろ実れぬ憂ひ秘めて転が

る
久保田昭江

身錢をは切るが如くの景気策されど負担は庶民の背に

小貴 昭

☆音もなく刻はびったり身に從きて運ぶ一步は生への一步

庄司 久恵

☆夜の水澄める棚田に村人の眠りみまもる弓張りの月

玉川 愛子

わが身より脱ければまこと煩はし一本の毛の背にひそみる

て
松本 啓子

笑み交はず集ひ哀しき教会に從兄弟の一周忌初夏の陽淡く

山本 賀子

選者十首 (8月号より)

選者 森本 元昭

閉ざされし暮しと祈りの修道院密かに憧るはたちの頃に

渡辺 幸子

給付金さもしきものの涙かや税の雫は税と化しゆく

奥田 清

☆旅の夜を心放ちて酌み交すぐらと酔ひたる飛驒の骨酒

木村百合子

大福寺の崖観音は安房の海望みて人らのたつきを見守る

佐田 孝義

五浦いづの空に今し飛び立たむタンポポの綿毛の白く天心の墓

所 多久和玲子

☆夜の水澄める棚田に村人の眠りみまもる弓張りの月

玉川 愛子

疲れ果て寝入る母に寄り添へば衣いに沁みてゐる稲藁の匂ひ

梅野 蒔

砂漠都市世界の粋を集めてドバイ空港大理石の美

土方 澄江

何事も人に遅るるわが憤ひこの世にあはあはとり残さるる

松本 啓子

香を焚き夫の仏間の一隅に心あずけて今宵眠れり

山田 玲子

選者 上田やい子

白波も真白き漁船も薄墨に刷かるるごとく小糠雨降る

君塚 一雄

少年か少女おもの面おもか阿修羅像あしゅらざう優姿ゆうさにも威光いこうのありて

木村 重夫

合歓の木の葉を閉ざしゆくたそがれにしづかに星のひかり

増しくる 末次 房江

☆夜の水澄める棚田に村人の眠りみまもる弓張りの月

玉川 愛子

疲れしと横たふる身に降り注ぐ「田園」の調べ暖かさもち

て 土屋 道子

娘に逢ふもこれが最期と走りゆく名残の桜降りくる夜道

鶴来けい子

紬織り習ひ織りしは二十歳はた過ぎ嫁ぐ方への緋搔卷

諸 幸子

汗に滲む野良着を小川に伏せ沈め踏み洗すすいする母を想へり

梅野 蒔

あたたかき産湯に赤子の蒙古班こつ然として冴ゆ祖より継

ぎしもの 山田田鶴子

水の面の月を囲みて叢の螢は光る星空の如

緒方 善丸

高崎 邦彦

文庫本一冊携え旅終わるもみじの赤き影を曳きつつ

松木 昭子

拔芳歌は巻頭二十五首「秋景」の掉尾を飾る。作者の旅は、京都鴨川に沿って大原三千院へ。比叡山を経て石山寺、湖東三山に至って終わる。秋の紅葉と歴史を尋ねる旅であった。京都の紅葉は美しい。三千院は言うまでも無い。「日常を離れて佇む三千院赤き色の視野に入りく来る」非日常に佇むのは三千院ばかりではあるまい。作者も又非日常の中の生を楽しんでいる。旅の良さはこの非日常性の高揚感にある。だから私も旅は大好きだ。作者も又、その感動に満たされた旅である事が十分に伝わって来る。比叡山の冷気・石山寺の紫式部、湖東(琵琶湖の東の意)三山ハイキング。作者はもみじの世界を堪能した事であろう。そして、その作者の心の支えになったのが一冊の文庫本。いったい何の本であったのであろうか。この旅で最も作者の心を捉えた場所か、あるいは古屋信子訳の源氏物語の一冊か。城崎を旅した時、志賀直哉の「城崎にて」の文庫本を電車の中に忘れて来た事を思い出した。旅には文庫本がよく似合う。拔芳歌、その文庫本が「もみじの赤い影を曳いている」と言う。

滝の音天城に生まれし清流の集える淵に小魚走る

よしだゆきお

天城を流れる水は冷たく清い。ワサビ田はそんな環境によって生まれた。この滝は狩野川の上流木谷川にある浄蓮の滝であろうか。近年は小説や流行歌などですっかり有名になってしまったが、明治末までは、たやすく人が近づけない場所であったと言おう。拔芳歌、その滝壺の淵を走る小魚に感動の全てを集約する事で滝の躍動を見事に表現した。

突然に顔を赤らめ泣きじゃくる色々模索頭の体操

伊藤 モト

私も七月二十四日二人目の孫を得た。作者と同様、私の家で約二ヶ月を過ごし、母である私の娘と一緒に父の待つ家に帰って行った。だから「この頃」と題する七首、私には実に臨場感があって良く分かる。特に拔芳歌、私達ははみどり児が泣くと何を要求しているのかとつい考えてしまうのだが、実はみどり児も何をどう表現しようか、模索中なんだ、頭の体操をしているのだと言う。この発想の新鮮さに感動した。

水張田を渡る緑風香き日の香り運び来清しく切なく

上田やい子

田に水が張られた頃、野辺を散策した作者は、その水張田を渡って来る新鮮な風(それは新緑の香りに満ちたものであったが)に心を動かされ、

前々号 (296号) 秀歌抜芳

杵き子供の頃の香りを思い出した。無垢であった子供の頃に親しんだ香りは、永遠に時を止めて私達を子供の頃にいざなう。私は海の風が運んで来る潮の香り。そしてそれは甘く切なく、そして清い。満員の電車の中で笑顔持つ都会のぬくもり厚く受け取る

岡崎 くに

作者は、太陽の舟の歌会に出席する為、土浦駅から上野駅、そして大井町駅と電車を乗り継ぐ。その行きも帰りも席をゆずられたと言う。人情はまだまだ捨てたものではないと言いたいのが、現実私は若者が老人に席をゆずっているのをほとんど見た事が無い。作者の人徳と言おうか。抜芳歌、その席をゆずってくれた女性と男性のやさしさを「都会のぬくもり」と表現したのが卓抜。

三反の田植がなんと一時間機械の力農を変えたり

大橋 俊弘

私も農村に引越して稲作が機械化されている事に驚ろいている。畔塗り機、代掻き機、田植機、稲刈機、乾燥機、糶摺り機、その機械を入れる小屋、運搬トラック、これ等を導入すれば二千万円程になると言う。私の妻の伯父は、八十を過ぎた老人だが多額の金を使い機械化を進め、今は一人で農業をしている。三ちゃんなど、遠い昔、今は一ちゃん（一人老人）農業。それで百俵。金にして二百万

円程だと言う。働き手がないから機械に頼る。年をとって身体が辛いから機械に頼る。お金が返せないからいくつになっても働き続ける。日本の米作農業は地獄だと義父も言う。作者の怒りは本当に良く分かる。農業をここまで悪くしたのは一体誰だ。そして借金を残して耕作放棄地が毎年増えてゆく。五度まで乗換えつつも出社せり明けやらぬ冬風が肌刺す

北川 昭

「忘れ得ぬ勤めの日々」は、日本の高度成長を支えたサラリーマンの過酷な生き様をまざまざと見せつける。私は作者より少し下。サラリーマン生活は現場ばかりであったが、二十代の後半で見切りをつけた。日本の繁栄はこういう生活を送った人々に支えられていたのだと改めて実感させられる。これからどんな時代になるかは分からぬが、こんな人々に支えられた繁栄があった事を決して忘れてはならない。

短歌会楽しき仲間にもまれて言葉つなぎの技を学びき

久保田美智子

久保田さんは水戸支部の人。笠間から「びよんど」へ、「岩間公民館」へ歌の勉強に通う。太陽の舟短歌会は歌歴の長短で差別する事は無い。皆平等、皆仲間。だから明るく楽しい。私はそれが何より尊いと思っている。しかし歌には妥協は無

い。一首でも良い歌を残す為に努力したい。短歌は何よりも心が大切だと思うので久保田さん、どうか心も学んで下さい。お互いに頑張りましょう。「孫の手」とは可憐な響き外来語がやまと言葉をかき乱す世に

小貫 昭

「孫の手」は「麻姑」に由来する。麻姑とは爪を長く伸ばした仙女。後漢の時代に麻姑の手の爪でかゆいところを搔いてもらえばと。やがて「麻姑の手」が「孫の手」に訛った。私には「麻姑の手」を「孫の手」に訛って使った人の気持ちがかかるような気がする。かわいい孫の小さな手で背中を搔いてもらったらどんなにか気持ち良く心が温まるか。祖父母も孫も。そんな温かい言葉は決して死なない。作者も同じ気持ちであろう。

善波 一江

稲妻は正しくは「稲の夫（つま）」。電光が稲に当たると稲が妊娠して子を孕む。つまり電光は稲の夫と考えられていた。それが江戸時代に誤用され稲妻となり、更に表記法の改変により「いなづま」が「いなずま」に変わった。私達は言葉からも農業からも遠い所で稲妻を見るようになった。拔芳歌、それならとテレビの画面で稲妻を見直後に春雷が鳴り響いた。新鮮で小気味良い。

疲れしと横たふる身に降り注ぐ「田園」の調べ暖かさもちて

土屋 道子

ベートーベンの「田園」は交響曲第五番「運命」に続く第六番目の交響曲。ベートーベンが母を亡くし、恋人を失い耳が聞こえなくなり絶望のどん底で自殺を考えながら、それでも立ち直ろうとして書いた「運命」、そして生きる希望を見出し書いた「田園」。この曲の調べの暖かさに疲れを癒す作者。今病の中で一所懸命生きている作者だからこそこの「田園」に癒されるであろうことは私には良く分かる。

ねぎ坊主つんとすまして霜堪へて皐月の朝も山に對峙す

二反田 實

それは自宅の庭の畑。一人で住む作者には十分すぎる程豊かに野菜が稔る。その中にねぎ坊主がある。ねぎ坊主はねぎの花。食べる事は出来ないが新しい命を生む。そのねぎ坊主の直立の姿は、何物にも負けまいとする作者の姿勢に重なる。一月に鴨川へ来た作者は飛驒の四月頃の陽気だと言った。飛驒は五月でも霜が下りる。ねぎ坊主は三月も四月も、そして五月も霜に負けず山と對峙して作者と共にある。

生ぬるいグラスを指の腹で撫で小さく畳んだ地図を拡げる

原田 寛

前々号 (296号) 秀歌抜芳

作者の独特の倦怠と脱出の営みが具象を駆使して見事に表現された。それは一幅の絵を見ている様だ。あるいは映画のワンシーン。小さく畳んだ地図は何の地図であろうか。読者はこの歌の中から想像するしか無い。ひよっとしたらネバerland。あるいは人間誰もが捜し求める国か。「幾山河越えさり行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅行く」牧水のこの歌よりあるいは空想の幅は広く深い。

手を合わせ武甲信岳の神感謝する全ての命守りたまえよ

藤井 武徳

山を愛し、人を愛し、平和を愛した藤井さんは、九月十二日塩見岳塩見小屋の近くで体調を崩し、そのまま帰らぬ人となった。私達の仲間になって、一年九ヶ月。しかしその二十一回の投稿の全ては山を詠んだものであった。全ての聖地を回り終えたと言った。その聖地とは何であるか私には分からなかったが、満たされた人生ではなかったかと推察する。抜芳歌の下の句、決して無駄にしないて生きようと思う。

心身の病の囲みの中にある長寿社会を生きねばならぬ

森本 元昭

上句「心身の病の囲み」が言い得て妙。現代社会は医学の発達により、身の病気の判定はより精緻になり病の数は飛躍的に増えた。心も又社会の

発展と文明の商業化がもたらすストレスでその傷みは飛躍的に増えた。それを「病の囲み」と捉えた。それでいて進む長寿社会。一見矛盾している様に見えるながら、現代医学の進歩はそれを可能にした。結句の「生きねばならぬ」は絶対矛盾への虚無を含んで悲しい。

夫よりも一歩さがりて朧夜を歩みし野路の区画に消えぬ 諸 幸子

その人は、作者が夫を亡くした時に勇気付け、温泉に誘ってくれた人であったと言う。作者はそんな大切な友人の訃報を聞いた。抜芳歌、あるいは実際に夫と二人、野中の道を歩いて行ったのかもしれない。しかし、結句の「区画に消えぬ」は死を暗示し、又その友の奥つ城をも暗示して悲しい。

一陣の風のやうなる孫たちに乱されている吾がメトローム 山田 紀子

それは五月の連休。何人の孫であろうか。「メトローム」とは、拍節器。規則正しく楽曲の速度を計る。毎日規則正しく過ごしている私の生活が、孫たちに乱されていると嘆く。しかしそれは甘い感傷を含む。私も二ヶ月間これと同じ経験をした。核家族が進み、親や子や孫や、兄弟が一緒に住めなくなった現代に、少しでも多くの肉親と一緒に居る時間を真実大切にしたいと思う。

作品 II

墓参り 鶴来 けい子

吾娘の墓参り終りてめぐる菅生沼鴨の親子のヨチヨチたのし
ヨチヨチと親の後追ふ鴨たちをいと楽しげに曾孫たちは追ふ
祖母の墓おまわり終へて曾孫らは増えし水鳥楽しげに追ふ
魚たちが幾許泳ぐ枕カパー曾孫の染めし昨夏の宿題
添削の詠草今日はもどるかと思文待つごとと落ち着かずをり
お泊りをねだる曾孫を連れて娘は一泊の旅我が家ですます
たまさかに車のはしる音のみの一日なれば鴉も親し

冷夏 手塚 ミツエ

青空に白雲立ちて嬉しくも青田の匂い風に運ばる
蒸し暑き夕に稲穂の花は夜な夜な青き光と遊ぶ
夏の宵煙火の匂流れ来て若き等の声人に消さるる
一日終了夕日に映える黄金の雲 真下の教会十字静かに
雲の端に満月の月かかり逝きにし老女の笑顔思ほゆ
燕の子初めて育ち今朝翔ちぬ 篠つく雨に帰巢の知恵も
空の巢を見上げて今日は何処までアルプス越えたか枝豆実る

時忘る庭 照山 好子

「育てています刈らないで」立て札の見守る向日葵をどりして
近寄りて紫式部の花を愛づ 果実思ほゆあはきむらさき
この時に花咲かせねば実はできぬ紫式部の声が聞こえる
掌の中にかくれてしまふアケビの実去年と同じ垣根に二つ
眺めたり草を取ったり鉢の位置変へたりもして時忘る庭
近づくは憚る思ひ野良猫の水入らずにゐる垣のむかふに
野良猫の生き抜くすべなむ吾の姿すばやく察知し逃げ去る子猫

吊橋の花 土屋 道子

失ひし言葉求めて脳の中探し廻りぬ眠られぬ夜は
果ての無き吊橋に揺られて渡りゆく一世の行先判らぬままに
吊橋に揺られて歩むわが一世拙くとも良し短歌友として
鶯草の美しく咲きぬと歌友よりの電話の声は弾みてゐたり
ひとしきり吾を襲ひし淋しさの歌友の電話に離れゆくらし
梅見にゆき湯島天神にて求めたる鶯草育てし遠き日偲ぶ
わが歩む吊橋に何れの花ありや足元見つつそりり歩まむ

梅ゼリー 角田 順子

一匙の梅のゼリーをふふみつつ暑中ハガキを友にしたたむ
夕やけこやけ聞きつつ子等は帰りたりバンドナ巻きて犬集いくる
蘭草敷き夏の香りをみたり朝顔今朝は五十二も咲く
老いふたり無用となりしステーキ皿キッチンに居座つてゐたり
台風の余波なるひとひ二人して皆既日食この世の見納め
夫と逢ふ約束時間刻すぎて喫茶の中で背中合せに
さみどりの若き芽もゆる木の下を目印にして自転車を置く

山家春秋

梅野 落

枯れ山の遅き芽吹きはもどかしく彩なき里に春を待つ身は
いのち無き土のみ見ゆる鉢なれど寒さしのいで新芽吹きをり
山道越ゆ 若葉はそよぎ梢にはうすむらさきの桐の花群れ
人影も無き山里は荒野といふ 涼風吹けば青き波立つ
賤ヶ家の夜長はことに寂しけれ真闇の中に木々は眠りぬ
枯れ尾花時雨れてくればなびきあひ今年の秋を仕舞ひけり
裸木の林の空より風花の舞ひ散り来たりて冬を告げたり

小町太鼓

土橋 茂徳

歌仙生れし「小野」を郷名にもつ誇り里人つどひ小町をまつる
市女笠置きて立ちたる七小町七首の和歌を花やかに詠む
神前で始めし奉納加留多会小町称ふるごとく読みあぐ
小町太鼓の打ち手に茶髪の女あれど気にせずなるも時の移りか
左ひざ深く曲らず右脚でベダル踏みゆく詩の視野欲りて
片脚で自転車漕ぐ吾を励ますか道辺の鈴蘭鳴らぬ鈴振る
チューリップ終り鈴蘭いま菖蒲 この畑の主の顔まだ知らず

夏の日々

土橋 茂徳

うつむきて天蓋ユリが土照らす炎のさまに雨の日も咲く
花壇囲む煉瓦ただせばその下の蟻が騒ぎをせずし拈ぐ
遅れたる友待つ生徒ら自転車のままであむろし夏服清し
ヘルメットを義務づけられて夏服の女生徒いかしく自転車踏める
寒中の置餌に育ちしスズメらか炎夏の夕べあまた木に待つ
ボールペンの芯ほど細き蝗の仔それでも身丈の20倍飛ぶ
萼紫陽花がことしも涼しき闇つくり午睡のモコの幻影見する

母の家計簿

富 永道子

収支なき母の家計簿日記らしデイサービスのひとこまのあり
無造作にベッドに置きし家計簿に吾の到着の「3時」は太し
寝る前のベッドに腰掛け今日の日の記すべきことを探すといふ母
家計簿の葉代りの鉛筆を研ぎし日はいつ 10センチほどに
「ハルさんに千円貸し」は饅頭を「二個二個くれた」春の日といふ
縦書きの列を食み出し「笑った」文字読み得て胸にこみあげるもの
収支なき母の家計簿日記らし「無事な日」頼むわれを許せよ

お盆

富原 澄枝

父は逝き母は施設に実家の盆昔のにぎわい今はもうなく
帰省の日子らの好物取り揃え料理上手な父はもう居ぬ
稲穂たれ立秋過ぎし野の道を迎へ火たきて人ら列なす
盂蘭盆会逝き人みんな茄子の馬乗りて帰り来懐かしの家
訪うたびに母の歩みはおぼつかず老いゆく姿見るは悲しき
面会のその日の母は遠くから我を見つけし悲しげな顔
「帰りたい」母の口ぐせ今日も聞く力なき声ふ近づきぬ

HULL

豊島 英明

ゆったりと右から左流れつつオレンジ色の雲ふわふわわり
「ざわざわ」と風に揺られる木の葉たちそんな中から顔出す小鳥
ゴマ粒のサイズに見える鳥達が木の上の上泳いで渡る
風に乗る車の音が伝え来る夕方七時庭に座れば
見上げると空にひとつ白き道真っ直ぐ伸びた雲の道あり
携帯で十三ヶタの番号を押すとながる祖国日本
夏の朝元気な日差し浴びながら今日も歩くよ命の旅路

夏休み

中村陽子

揺れ止まぬねこじらしの辺兎の走り声音弾けて夏休み来ぬ
海岸の崖砂だまりを転び落つる遊びの躍動未だ身におり
さしきしと素足潜らず幼きを受け止めくるる砂の優しさ
いとこ等に遅れてならじ砂丘駆けし鳥取はやさしき祖父の住む町
とびっきりの紫の色漬け茄子と地引網の烏賊家族の笑みと
父の泳ぐ背に乗せられ向ふ小島恐ろしけれど白兎めく
憂ひ知らぬ幼かりし日の夏休みあの世に持ちゆく清しき記憶

夏が来て

長須正文

梅雨明けて待たるる夏の蒼い空選挙カーひとつ声上げて過ぐ
夏が来て仰ぐ太平洋の沖かつて艦砲友を撃ちたり
夏が来て三十七度の猛暑日にバス停の女子高生は「ヤバイ」と宣ふ
見上ぐれば外は蒼空ゆうゆうと白雲浮かび気宇の壮大
だいじょうぶと言ってみたれど妻は背に手触れだめよと汗を確かむ
めっちゃ美味しいに吾は馴染めず滅茶苦茶に壊れたあの日敗戦の日
マニフェストを競ふ選挙の始まりて日食の朝選挙カー行く

ひぐらしの野路

永野昌子

幾年を迎えて送りし夏の日ひぐらしの声久しき夕べ
ひぐらしの声速近に暮れ行きぬ野辺には一つの涼を残して
幾年を過ごして久しくなる家の障子にうつるひぐらしの声
ひぐらしの山に暮れゆく大合唱聞きつつ我は往く夏惜しむ
八月の月になりたり我が実家の裏に日射しの光はななめに
うら盆の教会に白き提灯のさがりて風鈴音色の清し
雨多し今年の畑の不出来にて我家のジャガイモ粒の小さく

万里の長城

長沼温代

車窓より山に城壁見えかくれ八達嶺のふもとへ向ふ
山々に城壁延ばし襲来を防ぎしといふ今や観光
名残らぬ工兵農奴に築かせて時の皇帝の偉業となりぬ
立ち止まる事もならずに進み行く雷雨にせかさる万里の長城
避難所にあふるる人と休み終へ小雨の道をゆるゆる下る
長城より麓へ戻れば少しづつ青空広がり車窓に日の射す
長城ゆ帰りて聞きぬ新婚の二人落雷に亡くなりしとふ

夏はおくれて

二反田 實

南へと日はかたぶきて季節はすぎ雨音たかき日々の憂きこと
日は向ふ冬至の宮へ悲しけれ我が春といふ杜は遠かり
川霧は立ちて夏去る夕暮の別れの言葉 にほひせずして
毛虫はふ田舎の道は悲しけれ広きが故に命みぢかし
夕暮の風は入りけりのれん吹く卓を清めて西へ去りたり
静かにも聞五月の雨の日は沢霧立てる川音を聞く
誕生花 花菖蒲といふ我命つゆに打たれて紫涙ともみゆ

花 火

野村 富久子

マンシヨンの間よりあがる華麗なる花火をひとりペランダよりみる
この夏の打ち上げ花火はみどり色多く夜空を耀かせてる
家族らとながめた花火を今ひとりペランダに立ちて黙して目にする
どんという音をあたりにひびかせて花火は華麗に空にちりゆく
ひとりみる打ち上げ花火は華麗でもどこかにわびしさきまよって
あがる花火今も変わらず華麗なるが共にながめた父逝きて姿なし
花火終わり静寂な夜もどりきて父逝きしあとの月日をおもう

穩しき日々

原 武 寿 子

掃き出しの窓辺に身を寄せ空仰ぐ今宵の月の妙にあかるし
木綿地の布を貰ひ来てひたすらにモンペを縫えば亡母ははの浮かびき
風鈴の音に強弱高低ありて暮らしのリズムがひと日保てり
おむすびと少しのおかずとコーヒーで囲碁さんまいの夫に放たれ
若きらの帰省の近し盆の月髪形整へ二人で待ちぬ

一人居の翁に雨を先づ知らせ家に戻ればペランダは海
三月みづきのち後結果をみてから決めましよう主治医泣かせのボーダーライン

夏が過ぎ去る

原 田 寛

暗い夜虫の音を聴くやわらかい壁の向こうの静かな世界
グラウンドでカナカナが啼く夕暮に汗ばんでいたこの日の終わりに
夕暮の暗さと暗さが重なって紫色の小さな不安

理由もなくその意志もなく言葉には記憶を埋める冷たい痛み
日常が軽薄になる 他人の死は一つしかない一片の虚無
屋根の上夕立がひっそり通ってゆくさびしい夏の匂を残し
唯そっと死というものが訪れる一人の青春薬を飲んだ

草津温泉

土 方 澄 江

両家族孫と一緒に小旅行草津温泉息子の招待

草津の湯湯治に来たる著名人湯畑の石柱に旅人の銘
孫娘五人の大人に囲まれて笑顔振り撒き健気に遊ぶ
白根山流れる雲間にお釜あり変化の水面に歓声立ちぬ
独特の言葉と書にて魅了する相田みつをの無限の世界
いのちへの深い思いが込められて大地の詩人みつをの世界
夢かない百段階雅叙園の各間の豪華さ昭和の童宮

奥多摩

深 谷 幸 子

奥多摩のみちの峻しき 滝の音聴きつつ拝む馬頭観音
木もれ日の奥多摩の朝一瞥し蛇の横切る振り向きもせず
飛び跳ぬる蛙目前に何もせず山を見てゐる 山に生きるし
足元の苔の石段のかたつむり露の道辺の葉の上に乗す
奥多摩の川原で泳ぐ子らのこゑみどり葉ゆるる峽にこだます
そろそろと吊り橋渡る森林の匂たつぷりそよ風の中
峽ふかく川の流るるぼんやりと夫と二人で野に入りてこそ

左千夫記念館

深 谷 充 代

記念館に左千夫の遺品眺めゆる初代長次郎の赤染に魅せらる
文学碑の上を被へる山桃は熟した果実を地に振りこぼす
木洩れ日を浴びつつ巡る五百羅漢表情さまさま時間は待たず
この浜に心癒せし知恵子の碑強き雨降る九十九里の空
児の使ふプラスチックの硯では心落ちつく道具にあらず
硯石探して歩く骨董市やうやく見つけぬ北国の石
半月が赤レンガ倉庫照らしるかつて訪ねし港横浜

九十九里浜

福 地 啓 子

ゆるやかにそして激しく返す波水際の砂のころころ転ぶ
水際辺を友と歩めり旅の朝宿の浴衣を風に靡かせ
洋々と海へ行く川どこまでが川の流れか海の始まり
潮風の髪撫でてゆく砂丘にて小腰をかため小さき貝ひろふ
拾ひ来し貝殻ひとつ手のひらにのせれば砂のはらはらと落つ
小さき貝耳に当てがひ波の音想ひ起こしぬ静寂の部屋に
帰りきて一人ひとりの面輪顕つまだ覚めやらぬきぞの昂り

山 その22

藤井武徳

未熟児で生れし吾が槍ヶ岳頂きにたちて母へありがとう
暗闇に浮かぶシルエツト槍ヶ岳ライトを照らして一歩息をはく
その神は吾を見守りひたすらに願いをたくし想いはみのる
御所にて聖地をめざせ！吾に告げし神はもしやしてあなた様
尾根道をしゃべりながらおまえさあ歩き続けたい今だからこそ
給食のカレーに初めて無農薬のニンジンを使ううれしき知らせ
山の神全て集り槍ヶ岳変わらんとする祈りは続く

芸大コレクシヨン

松岡三夫

鮭描きし高橋由一のリアルに逢ふ芸大地下の展示室の夏
芸大のコレクシヨンの誕生と成長変容の見事な開示
悲母観音狩野芳崖が創りしは1888年なるとかや
背を見せる横顔の婦人像1909藤田嗣治の署名くつきり
《序の舞い》は松園描く美の極み今にも舞妓滑り出しさう
平櫛の近代彫刻コレクシヨン久しく彼が手中にありしとか
鮭の絵は一点なりとも疎にせずまこと真善そして美なりき

若き日の告白

三澤 誠之助

初めての出会いの写真片瀬浜海水着で立つ小学一二年
二回目は彼女の実家山梨で縁に腰かけ互にだんまり
養父母の言いなりになり結婚も決つてしまいぬ嫌いではなく
婚前に養父を送り上京の彼女二泊も一指も触れず
実家では五人姉兄の末っ娘で習い事多くも料理が欠けて
養母から言われて出来ず毎晩に吾の前では泣き続けたり
養父母と一緒に生活無理なりと置手紙為し妻と家出す

芦花公園

松木昭子

清張展見るべく駅に降り立ちし芦花公園は緑薫れり
清張展見るべく目指す文学館芦花公園の緑深まる
「砂の器」幾度観たろうテーマ曲流れ思ひぬ清張展に
いにしえのとき経て今に聳え立つ巨木の楠が空を占めたり
蒼天を突きて聳える巨木の樹来宮神社に楠祀られぬ
樹の肌の赤さを晒す博打の木紫陽花叢に異色を放つ
樹の下に夜を明かせしことありや博打の木がおぞましく立つ

硫黄島

松本啓子

夕風のまとふ大暑のみなとまち小柄の母は吾を生みまじき
たまらぬと浴衣の袖をまくし上げ立居せる母おぼろにおぼゆ
たどたとと古典の会の続け来て八月は戦中の日び語り合ふ
弘彦の「釋道空」を聞き尋ね当つ大井出石町の冥き二階家
膝かため硫黄島の「らちお」に堪へませし道空の二階家まぶたに遺る
硫気みつる挿鉢山の穴倉に戦ひし兵の手紙出で来つ
日蝕に人かげのなき硫黄島挿鉢山は凄しみ尽くす

ウォーキング(夏)

丸山孝一郎

人も木も花も背伸びず梅雨晴れ間元気な熟年暑さに負けず
流れ出す汗を拭きつつウォーキング木立の風にはっと一息
びしょ濡れの上着のまま日常の食材の話薬科大で聞く
胡瓜胡麻胡桃に胡椒胡蘿蔔など胡の名つく食材今日も夕餉に
胡の話聞きつつ浮かぶウィグルの騒乱騒ぎと国の変遷
森深く入定塚の僧の名は長信とあり五百年経つ
兵近く十三塚の遺跡あり古き遺物に困地迫れり

他の人に完全であること求め語らずにゐる己の短所
悲しかり他人の不幸よろこびて己の不幸耐えがたしとす
重荷負ひ逆境の道歩み行く同行二人友のあらわる

修道の館に入るも変らざる人の心の深き欲望

孤児なりし故に住みぬし母の家己を捨てて吾れを育てし
できざるも財産地位名譽などすべてを捨てて吾れは生きたし
義人とは好悪によりて事決めず己を捨てて事を決めゆく

友の死

宮井 富美

肌を知る秋風受けて濯ぎ物干す間も風は通り過ぎゆく
友の死を伝へ知りたる昼前は食欲とみに少なかりけり
母校は水泳部が強かりき黒き水泳着の友の姿浮ぶ

水泳の選手でありしあなたは笑顔明かるき友にてありし
体操の時間はタオルのケープ着て海へ行きたり海近ければ
校庭のプールは選手のみ使用なり選手のあなたの笑顔が見ゆる
同級生がまた一人逝くさびしさに老いの一と日を想ひ出にゐる

渚

宮島 マツエ

この影はわれの護衛かまとわりかつかず離れず音消してくる
宵闇を忍者のごとく忍びよるこれがエコ車のHV車か
夕焼けに額も胸も赤くなり心の鎧溶けて流るる

エレベーター乗れば二人の密室に思わず目をやるボタンの有る
校庭にラリーの続く昼下りテニスも詩も道は見えない
洗足の池畔に眠る勝海舟の墓石はそと場所を占めいつ
九十九里智恵子の遊びしこの渚寄するさざ波素足を洗う

鏡台

宮原 喜美子

世代越え引き継がれゆく嫁入りの鏡の重み気づかされおり
わが母の、祖母のかも知れぬ鏡台の鏡面透きて心奥うつす
古りてなお精緻極める鏡台にわが態正す不思議な力

いつの日も実家に在りて人生の初心にかえる聖域となる
揺れ動く母うつし出しし鏡面は大人の入口寄り添いて見し
鏡台の秘密めきし抽出しを小さく揺すれば散らばりし過去
願ひこめ何故年齢とるのと問う我にしかたないわと母は答えり

みどりの雨蛙

村田 一江

本堂に若き僧侶の読経ありゆき渡る声アリアのごとく
墓石名の窪みに小さき雨蛙「家」の字の中みどりがふたつ
夏風にゆっさゆっさと夾竹桃撓めて花を一面に零す

銀杏の木両手両足踏ん張りて鐘楼の前に聳えて立てり
カタカタと軽い音する竹林に倒木多く黒く重なる
ナナハンの地鳴りに足の竦みたりなれど乗りたし夏の明け方
ナナハンは夢の又夢電動の自転車乗り行く成田街道

久しぶりの車内

村田 孝子

早朝の千葉駅ホーム人々の忙しき背中列中に居つ
楽しみつつ行きましようねと鈴木さん夏季大会場一の宮行
頭をかきあくびをしつつ女子高生車内にどっこいカバンを広く

女子高生丸めしセーターほうり込みゴツクタクタのカバンまさぐる
化粧品の出し入れ忙し女子高生両手でさぐりぬカバン底まで
貫緑の化粧仕上げし女子高生を見て見ぬふりの前席吾は
本文具カバンに入れずの月曜日親は知るべし車内の楽屋

政權交代

森 五貴雄

のどかなるいすみ鉄道青田行くふるさとの灯をともしつづけおり
晴れわたる露天風呂に身を浸す甲斐の山々緑に映えて
坂道を登りつめるとぶどう園風雨に耐えて実は熟しおり
コンパインの響き止みたる昼時の田に白鷺が首を伸ばしいる
半世紀政權交代実現し不安と期待静かに見守る
今動く新政權の前途にはいばらの道がたちはだかりて
渋滞のだんごう坂のすすきの穂風に吹かれし秋はたけなわ

舞い時空

森 田勝昭

篝火と奉行と白丁揃いたり愈よ始まるシテたる主役
薪能そのゆるやかな舞い時空吾を包みて異次元へ往く
葵の上恨む演者の形相に篝火煙り舞台は迫真
演目が佳境に入りて月と雲のコラボレーション舞に加わる
篝火と遠くの灯火がリンクして舞台を包み舞が拡がる
玄関の迎え花早朝のシルエツトすだれ越しなる夏が明けゆく
龍体の狩野川館林の竜巻とこの大雨風は何の予兆ぞ

友逝きぬ

森 本元昭

一瞬の地上の生活思ふとき土中に長き蟬の哀しく
肺癌の苦痛を解かれ安らかに笑みを浮かべし友を送りぬ
カプトムシ出番来るまで白々し幼虫の身に堆肥に包まる
長雨にカビや湿気が隙間から我が部屋ぬちに入り込みをり
千円の高速度はのろのろと庶民の車に占有されをり
竜巻と集中豪雨の攻撃に全国各地が晒されてをり
良く話し笑ひ給へる妻あれば今日も楽しきドラマを描かむ

慈愛

諸 幸子

療養の友おもひつつ日の過ぎぬ 鬱空に見上ぐる凌霄花の朱いろ
神仏の慈愛にあらむ友見舞ふホーム(ホーム)にご子息と逢へし一瞬
肺炎を患ひ友は病院にご子息の案内にまみえ叶ひし
母上の車椅子を押す医師なるお息の篤き姿に胸のつまれる
自宅への「一時外出」とふ君の自動車病院去るを見送る
母上の余命こころ心情にご子息は自宅に終のみとり選りしや
宝なるうからに君は看護られてわが家ゆ肅肅、黄泉の旅路へ

鳩待峠

八代 陽子

早朝の鳩待峠にカラフルな身支度ととのえハイカー集う
昇りゆく道の傍ら花つけしシラネアオイについに逢いたり
熊笹の朝露わけて峠道朝の冷気をいっばいに吸う
熊笹の丈なす中に見え隠れ夫の後追ひひたすら歩く
一群のヤナギラン咲く丘に立ち原わたる風胸元ぬける
這い上がる濃霧たちまち夫をつつみ姿隠しぬ八幡平に
目を凝らし雲のたなびく山並に鳥海山の頂のぞむ

天王台駅北口広場(四十九)

山田 紀子

わが窓の網戸に止まる蝉ひとつ忍者のごとく内を窺う
テーブルにひとりコーヒー飲むわれを監視してゐる網戸の蝉は
コーヒーの香りを好む蝉なるか一緒に飲むと声かけてみる
見つめ合ふ蝉とわれとの今生の一期一会か 時を惜しみぬ
蝉よ蝉いずこに果つる運命とも短き夏を惜しみなく鳴け
夕庭に百日紅の花かすか散る落ち蝉ひとつを哀れむごとく
夕風に連の大葉はひるがへり明日咲く蕾のうす紅を見す

五十年経つ

山田 田鶴子

微くさく闇をひっそり潜めゐる五十年前の亡父の皮手帳
虫が喰ひ湿気に張りつく古文書を少しづつ剥がす父を話題に
疎開の荷あらし父の蔵書にて第八車を押して行きたり
「本居宣長」を語れる父の放送を正座し聞きしも淡くなりたり
五十年散逸ふせぎし兄の思ひ万巻の書冊積まるる一部屋
老い深き兄が言ひ出づ亡き父の古書もろもろの行き先のこと
貰ひ来し父の一冊いつの蚊か乾び骸の足を屈めて

盆のあとさき

山本 賀子

義妹の訃報に接し呆然とす優しかりし夜辺の語らひ
童心で抜き手砂山清見の海声まざままもみな仏かな
亡妹といつも求めし蒲鉾店秋の浜風簾影射し
行間に面影拝して師の遺作過ぎにし時の短きを悔やむ
通勤の人波わけてポスト前文字見る吾は頼りなき人
知らぬ間のまつり仕度に舌を巻く地元の力今宵股賑
芝二丁目まつりの宵のだれかれも古き好き風のびのび笑ふ

祇園祭

山田 玲子

祇園祭古き仕来り遣さんと地域ぐるみで手助けをする
一斉に胸のすくよな撥捌き祭太鼓に若きら勇む
笑顔して挨拶くれし青年の祭り姿の浴衣すがしき
声をあげ子ども屋台が出でゆけり明るく伸びよと未来を祈る
若き日の夫も担ぎしおみこしの華やぎ今も目に浮びくる
接待の料理を作る女たち暑さの中をてきぱきこなす
御社と並び立てる小学校わが家の子らも守られ励みし

蓮の寺

山名 恒子

蓮寺にはなひらく音聴きたしと坊に早寝かつら樹の下
午前二時蓮はいかにと思ひつつ勤行に会ふしげれ堪へて
闇明かる時かすかなる風うけてゆるぶや蓮のはなびら一つ
白花を高く掲げてひとひらをほどけば闇の押されゆくの
午後陽を蓮は厭ふやはつかにも花びら閉ぢてうつつむきてゐる
蓮寺に鐘撞きて音韻々と山に飴す暑さ凌ひて
大皿にあふるる西瓜みづみづと庫裏より届く暑氣払いつつ

上野駅

湯本 いと

鈍行で上野駅まで七時間昭和頃われ上京す
若ものが憧れの的東京へ胸を弾ませ汽車に乗りたり
長ながとトンネル抜けて関東へ顔は煤けてうす黒くなる
上野駅出迎う人と送る人おくに訛りのとび交う中に
東北の玄関口の上野駅新幹線に面影消され
目瞑れば昔の風景浮び来る上野駅舎にしばし佇ずむ
上野駅の変貌見つめ西郷さん久遠にここに立ちつくさんか

ホサキナナカマド

吉岡 悠紀子

マイツリーホサキナナカマドの白き花どこで見れるや場所を探しぬ
探しあて昭和公園に電話せり一週間前に散りしと返事
開花まで待つしかなくあせらずに一年先の七月を待つ
空爆に逃げまどひし日記念して野宿会とふクラス会なり
十二人集ひし友ら旧姓と方言とびて夜は更けゆきぬ
共学の母校のさまに目を見る女の園の面影うすく
中也の碑何して来たかに胸痛む過去を忘れて明日に生きなむ

余生

よしだ ゆきお

ウォーキングあかねの雲に鳥の影今日一日もかろく去りゆく
今夕の夕餉はそばに焼なすびひのきの枀に一合の酒
朝風呂にゆっくりひたり策を練る勝ち抜き囲碁の決戦日なり
エコポイントギフトの券が届きたり君を誘いて街を散策
晩秋に語る舞台の台本は「宮本武蔵」日々これ練磨す
滔々と流れる血潮まだ健在吹雪又よしもみじくれない
天よりの附与され給いしこの生命地に別るる日悔いを残さず

山手線

吉田 律子

山手線ストック持込む人ありて香ひろがり次は五反田
愛媛県河内産の晩柑ばんかんを毎日食べて七月が行く
孫達に何を望むと聞かれれば性格の良さが一番
白き肌余計なものは何もなく地球にやさしい固形石鹸
ペットボトル蓋をひねって一気飲みこんな贅沢していいのかな
得ることは別の何かを失うとそれに気付きて幾とせか過ぐ
欲しきもの性別問わず探してゐる真実語るたのもしき友

昼下り

渡 辺 幸子

身罷りて後に知りたり愛読書父と弟の司馬遼太郎
昼下り拡大鏡にて文字追う父 母の呼びかけ聞こえぬ振りして
卒寿過ぎディケア馴染まぬ父なれど将棋指したりと笑顔で告げぬ
「火垂るの墓」「ガラスのうさぎ」に涙した父は戦争語らず逝きたり
将棋指す八十路過ぎたる叔父と父真摯なまなざし時折声挙ぐ
埋め立ての街整いて蟬の声うわんうわんと声を限り
緑濃き葉陰にいくつ苦瓜の昨日見つけて今日は隠れて

千畳敷カール

吉田 昌夫

夏の朝人もまばらなロープウェイ花を愛でつつ千畳敷へ
義理の兄眠る木曾駒ガスの中寂しく揺れるクロユリの群
雨風に花も震える雪渓や足を取られて前へ進めず
土砂降りにぬかるみを増す遊歩道別れを告げぬチングルマの群に
薄日さす菅の台にてバスを降り天を仰ぎつつ雨具を畳む

高山吟行会案内

日時 平成二十一年十月二十五日(日)～二十六日(月)

場所 岐阜県下呂市小坂町湯屋 湯屋温泉 奥田屋

第一日 JR高山駅前集合14:40 出発15:00

紅葉の飛騨路を辿り、小坂溪谷の奇石「巖立」と「三ツ滝」を鑑賞し、日本一の炭酸温泉を浴び、特産「ソバガキ」と「手打ち蕎麦」を賞味。岩魚の「骨酒」を酌み交わしながら歌友と親睦をはかる。

第二日目 紅葉に染まりながら「鈴蘭高原」を散策し、「御嶽霊峰」を間近に、乗鞍岳・穂高の遠望を楽しみ、鄙びた伝説の山村を経由し、高山市に入り、古い町並みを散策する。

費用 一万二千元 旅館宿泊費(バス代含む)

申込み 十月十日までに奥田清岐阜支部長宛、はがきでお申

し込み下さい。505-0041

美濃加茂市太田町492-5

文語で短歌を詠む人のために(十)

奥田 清

形容動詞

国文法要覧によると、形容動詞とは、活用のある自立語で、単独で述語や修飾語となることができ、基本形が「一なり」・「一たり」の形をとり、意味のうえで事物の性質や状態を表わす単語である。

三色の色① あざやかに残しゐるリュウグウボタルを妻に贈

りぬ(阿部正路・火焰土器)

② 惨たりし夏もたちまち過ぎ去りて雲あたたかく丘を包み

ぬ(同)

右の例歌の①あざやかに ②惨たり を活用表にまとめる
と、次のようである。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
あざやか なり	あざや	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ	ナリ 活用
惨たり	惨	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ	タリ 活用

文語の形容動詞は、右のように、ナリ活用・タリ活用の二種類があるが、口語にはタリ活用にあたるものがない。また、口語の形容動詞には、命令形がない。

形容動詞という品詞が認知されたのは、他の品詞と比べて

日が浅い。私が國學院大學で国語学を教わった田辺正男先生なども「形式状態詞」の名称で説かれていた。

ともあれ、形容動詞の機能は、語彙数の少ない形容詞を補い、事物の性質や状態を表現する語として短歌に詠まれ豊かな味わいを現出している。

密やかに魂は葬らる 彼の人は聖徳太子の皇子とし眠る

したしたと尚したしたと伝ひくるかすかなる音 永眠を覚

ます(二首ともに石塚立子・風待ちて翼は)

二首のみを引用したが、同人には「ナリ活用」の形容動詞で詠まれた秀歌が多い。しかし、「タリ活用」の歌は、「青年の木遣りの節の朗々と七年一度の祭り祝ぐ」の一首のみである。元来、タリ活用は漢語系の語に多く、和歌では漢語系の語は避けられたので、古来あまり使用されなかった。したがって、同人にもその傾向は見られる。が、現代短歌では、意欲的に使われる例がみられるようになってきた。「磷々と詠みくだすべし忘却も秋七草もひかりの微塵」(前 登志夫・樹下集)「磷々と」とは、石の間を清水が流れるさま。「詠みくだす」さまの形容としてはみごとである。「死は蹠蹠とわれのしりへをあゆみけり朝顔市に晝の燈ともる」(塚本邦雄・青き菊の主題)「蹠蹠と」は、足をひきずって行くさま。塚本の「現実の現象の彼方にある真実をつかむための〈幻想〉表現にぴったりである。「タリ活用」は、短歌語彙を増やすために使ってみた。

作歌の目・作歌の技法（第五十七回）

飛驒の歌人 うたひと

三木 勝

神岡の町を訪ねた。台風の去った後なので、飛驒はいずこの沢からも水が、ほとぼしり出ていた。神岡城の天守閣に登ると、眼下の高原川が清流を激流に変え、日に輝きながら美しく激しく流れていた。高原川は左手から右手へと流れ、右手下流には、神岡鉾山が見える。穂高を源流とする高原川は、下って宮川と合流し、神通川となる。その神通川流域でイタイ病が発現し、原因となる鉾毒は、神岡鉾山がもたらしたものであったが、天守閣から見ると神岡の町は、川に沿ってその甍を静かに並べていた。

次の日、鯉のいる宮川を鍛冶橋のたもとで見下ろしていた。川は増水し音を立てている。鯉は見えない。出格子のつらなる軒下には用水路が流れる「古い町並」。ヨーロッパ人がこの町に「日本」を訪ねて来る。ヨーロッパにはない木造りの家が立ち並ぶ町並。木の建物の優しさ。江戸時代、高山は飛驒の大都会であった。この地の文化の奥行きは深い。二反田さんとは、高山駅前で落ち合う約束をしている。立秋間近かな柳橋の通りの一本道を駅へ行く。

薄日射す斑はたれの山は目覚めぬて枯葉の床に草の芽抱く

梶野かきの 蒔

梶野蒔には、『ひだの四季』という四冊の絵本がある。

この絵本は、平成二年から十年迄の九年の歳月を経て完成させたもので、文は蒔が書き、絵は夫の梶野均が木版画で描いている。三冊目から四冊目の発刊にかけては、七年の歳月が流れている。三から四への道は長かった。この間、均は、病床にあって木版画を彫り続けた。行き詰った蒔は、平成七年にNHK学園の門を敲いた。三年後、四冊目『ひだの四季 せせらぎの歌』は完成し、NHK学園創立三十五周年記念事業で「自分史講座特別賞」を受賞した。

『ひだの四季』四冊は、菊ちゃんという女の子の視点で乗鞍岳の西の麓にある村の一族の生活が描かれている。暖かに父母の愛情や思いやりが描かれ、小にいちゃんと菊ちゃんの兄弟げんかもたびたび描かれている。その小にいちゃんは、学校の児童全員で集めた供出の山菜を高山の町に自転車運んで帰る途中、車の自動車に轢かれて死ぬ。小にいちゃんを轢いた若い兵隊さんは、毎日貴重な牛乳を病室へ届けてくる。それを飲む小にいちゃんは、その度に「菊に、半分やって」と言う。それを聞いた菊ちゃんは、小にいちゃんの亡骸を前にして、「にいちゃん、小にいちゃん、菊のことかんにんして・・・」と泣き伏す。

東京で写真屋さんになる修業をしていたサトルにいさんは、召集され、のぼり旗のもと出征していく。満州の戦場で腹部に被弾し、帰還をするが、銃創による腹膜炎は回復せず、悪化し痛みが増し、最後はモルヒネで痛みを鎮めるが、副作用で暴れるようになる。ベッドに括り付けられる。さらに副作用は進み、聞けず見えずの状態となる。

おかあさんは、小さな声で話かけました。一しょにつき添っていた看護婦さんが頭をゆっくりと左右にふりました。「丘野さんは、もう目が見えないのです。耳も……。どうかお願いします。おかあさんだとわかる方法を考えてあげてください。」「わかりました」かあさんの目がキラリと光りました。そしてためらわず改良服の衿をひき裂くようにして、自分の胸をはだけました。それから、乳房をサトルにいさんのやせたほほに押しあてました。「サトル、かあさんやよ。わかるか、サトル、サトル！」かあさんの乳房は、ドク、ドクと鳴り、心ぞうの音を伝えました。

サトルにいさんの亡き後、学校で村葬が行われ、「故、陸軍上等兵、丘野サトル君英霊」となり、墨痕をにじませたのぼり旗となった。高山の病院から小ねえちゃんに押されながら、荷車で亡骸を運ばれてきた小にいちちゃんタケシも、学校葬であったが、終戦の日、父さんは言った。

「タケシ……。サトル……。戦争は終わったぞ。もう、これで、パンザイは、ないんじや。ヤスクニ神社へ行かんでもええのよ。おまえたちは、とうさんのところへもどれ。とうさんが、きつと、ええ墓をつくってやるぞ」

飛驒の四季

蓬摘み新草餅と一人笑む亡夫に供えむあんこまぶして
日は沈みまだ取り終えぬ春菜摘み暗き手元を半月照らす

外箴よし枝

夏となり少し遅れて紗羅の花こぼれこぼれて咲き誇りをり
中秋の満月拜み稲田見る遠くかすみて黄金伏しをり
窓叩く外は吹雪けど一人居るだけか来むかと望きても見ろ

外箴よし枝さんは、日本画を描かれる。糸瓜や枇杷の美しい絵を見せて頂いた。過日九十三歳でお亡くなりになったという谷口又蔵さんが作られた「米上げしょうけ」を見せて頂いた。力強く編まれて、竹の目が端正に美しかった。

「米上げしょうけ」は、露の『ひだの四季』にもでてくる。
二反田邸の囲炉裏の上の天井には、二重の扉の仕掛けが施されていて、温度・湿度の調節は言うに及ばず、外界からの音の調節もできる仕掛けになっている。冬はその囲炉裏に座し、眼前の借景を眺め、降る雪の音をひとり聞くといい。
「如水海石組」という美しい石庭が二反田邸にある。

この名は、『正信偈』の、「衆水の海に入りて一味となるが如し」による。二反田實は月一回、片道三時間をかけ、美濃加茂の岐阜支部歌会・奥田清のもとへ通っている。

玻璃の戸に小さき命二つ三ついかになれしやいかに死する
や
二反田 實

帰路、飛驒のいずこの沢も、水がほとばしり出ていた。
この水のように多くの成年男子が飛驒の沢からほとばしり出て、戦場へ行ったのだ。人も馬も。

青葉陰苔生すままに鎮もれり陸軍伍長奥田庄之助の墓

奥田 清

歌帖余白（七十） — 編集雜記 —

松岡 三夫

すばらしい霧、うっとりさせるような霧水、私どもはこれらの諸相をほんとうに楽しみました。森は美しく飾られているわけですが、しかし茨の茂みや草むら、或は芝の草原など、普通は地味なものとされているものだって、順番が来て最高の美となるかも知れないのです。（ミレー）

『晩鐘』や『落穂拾い』で有名なフランスの画家ジャン＝フランソワ・ミレーは、一八一四年十月四日、ノルマンディー地方ラ・マンシュ県の海辺の町に生れます。大原美術館にあるパステル画『グレヴィルの断崖』は晩年の一八七一年の作だが、故郷の海岸の風景を描いたものです。また代表作のひとつ『種まく人』が岩波書店のシンボルマークとして採用されたのが一九三三年、そして『種まく人』がサザビーズのオークションで競り落とされ日本に請来されたのが一九七七年。いま山梨県立美術館の所蔵になっていることはよく知られています。

ミレーは、新古典主義の画家ドラローシェに師事し、肖像画や歴史画を学ぶが、サロンでは認められず、一八四八年出展した作品『箕をふるう人』で初入選、それを転機に農民画家に転向、翌年パリの南方約六十キロにあるフォンテーヌブローの森のはずれのバルビゾン村に移住し、風景や農民の風俗を主にしたレアリスム絵画を描きつづけ、「バルビゾン派」

と呼ばれます。晩年には印象派に近いパステルや水彩画も製作します。

最初に引用した文は、バルビゾンの森を逍遙する画家の感動を、自作『タンポポ』の絵をわたした建築家のガヴェへの手紙のなかで述べたものです。また、それより以前に批評家ペロケに宛てた手紙で「どんなものでも時と場所を得さえすれば、美しくなるものだし、反対に時宜を得なければ、美たれないといえる」と述べています。

バルビゾン定住後、ミレー自身の絵画表現のめざしたものを示す言葉に

「野暮なものを至上のものに役立たせ、人生の平凡な一日から高貴で偉大なスペクタクルを現出させ得る」
があり、その実践として『井戸から戻る女』を描き、「この女が水運びの女でも女中でもなく、家事に使うための水、夫と子供たちにスープを作るための水を汲んでくる女であり、手桶一杯の水の重さを、それを運んでいる様子を表現したかった。また彼女の両腕を引っ張る重さと日光による瞬きが作る一種のしかめっ面から、いかにも田舎の人らしい善良さを推し量れるようにした」と述べています。べつどころで「芸術はなぐさみの遊びではない。それは戦いであり、ものを噛みつぶす歯車の機械である」と言い放っています。美の中の闘いです。

『晩鐘』や『落穂拾い』の中の静謐ともいえる美の奥に秘められた壮絶とも言うべき闘い。短歌にも必要です。

連歌

秋・限りなき空

シーサイド短歌会にて

八月二十一日(日)

(記・久保田)

初折の表 (初裏)

- 発句 秋の昼懐かしき友へ会ひに行く
- 脇 日焼残りてこぼるる白き菌
- 三 不覚にもころびて前歯欠けたりし
- 四 木槿むぎけの紫陽に光る中
- 五 やがて花閉ぢて新月待ちにけり
- 六 夕闇せまり外灯つづく

初折の裏 (初裏)

- 初句 街の夜静かに月を眺めたき
- 二 浴衣の乙女子そぞろに歩む
- 三 仲見世の浴衣すがたの外国人
- 四 異国の旅に吾れは誘はれ
- 五 秋風に膚はだかすがしくなつかしく
- 六 ヒースのむらさき敷きつめる丘
- 七 丘に立ち好きな花々咲く日待つ
- 八 総み身に浮ける涛のとどろき
- 九 松風に海鳥合はず声こゑ愛し
- 十 静かにひとりひびき楽しむ
- 十一 九十九里の砂丘に近し月見草

十二 月の明りに誰を待つらん

名残の表 (名表)

- 初句 月の浜君と二人で歩みゆく
- 二 君うるはしく夢さそう夜
- 三 「月の砂漠」小学五年で踊りたり
- 四 わが小学校はばらの園なり
- 五 金次郎見つつ学ばぬ吾れなりき
- 六 奉安殿の木造校舎
- 七 コンクリートに囲まれし庭土もなく
- 八 児等はサッカーに余念なかりき
- 九 寂しさをかくも素直に思い出す
- 十 吾れは辿りしこの世の径を
- 十一 人の世の道一步づつ歩み老ゆ
- 十二 日々新しき刺激のありて

名残の裏 (名裏)

- 初句 明日も又歩みゆかんと思ふ日々
- 二 聖地巡礼ふたたび吾れに
- 三 今日の日を無事にすませて戻る道
- 四 生あるかぎり夢もちて行く
- 五 松籟の響きし道の一刻を

たかし

磯湖

恵

ぐみ

みち

大歩危

あき

ゆき

桜玉

たかし

磯湖

恵

ぐみ

みち

大歩危

あき

ゆき

磯湖

恵

歌会報告

本部歌会 八月例会(第355回) (宮島記)

日時 八月八日(土) 13時～16時10分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 生稲 進同人

出席 31名 出詠 32首

代表より「鴨川では稲刈りが始まっている」と言われ八月上旬の刈り入れの早さに驚きました。10月の吟行会が楽しみ。来年の二月の歌会は第一土曜。

阿部先生の歌集「天山離離」について解説がある。その歌集の中の一首

・蟻螂は鎌をかかかて果てており戦ひすみし日の夕暮れに夕陽の美しい西安で詠まれたという。

10月の岐阜の吟行会は歌会をやるのか、親睦のみかの質問があった為、詳細は9月の例会で山名事務局次長から発表するとのこと。三木企画部長から、太陽の舟はインターネットの、ホームページを立ちあげ10月より見られるよう努力するとのこと。ご期待を乞う。

今月の高得点者は次の通りです。

・失ひし言葉求めて脳の中探し廻りぬ眠られぬ夜は

土屋 道子

・馴染みし櫻の大樹唐突に伐らればかんと真つ青な空

山田田鶴子

・曲りてもまがりてもあるつづら折り米寿傘寿の二人三脚

中村 陽子

・曲りてもまがりてもあるつづら折り米寿傘寿の二人三脚 (北川記)

日時 8月8日(土) 10時～12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 北川 昭

出席 8名 出詠 8首

今月の詠草は特に会員各自の人柄を感じさせる歌が多く、意見が尽きないため歌会の進行に一苦労する程でした。

中村さんの「いつのまに過去覗きある日の多し戻りたきとは思はざりしに」は議論の末「何時のまに過去覗きある日の多く戻りたしとは思はざりきに」で落ち着きました。

また、話題の一首は生稲さんの「『死ねないね』があいさつ代わり九十余の爺に返せず気の効く返事」でした。

今月は中村・丸山さんの七首詠について鑑賞し、作者の意外な感性や身近な周辺の自然の歌に感心させられました。

水戸支部 支部長/長須 正文 (深谷記)

日時 8月16日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 5名 出詠 10首

司会 塩田 秋子

歌会の前に第一回笠間市公民館まつりが十月末～十一月四日の五日間の日程で発表会、短冊の展示等を連絡し、送り盆にもかかわらず、5名の出席ですが勉強会ができました。・奥津城の風吹きぬけるひとところましろに百合の群れて咲

きそり

品川支部

支部長／久保田昭江

福地 啓子
(月田記)

日時 8月20日(木) 13時～16時

場所 旗の台シルバースター

出席 5名 出詠 9首

司会 月田 藤枝

会員の皆さん前向きの姿勢で頑張っておられ、明るい気持ちで何時もの様に支部会を終えました。来月よりは当センターのリフォーム工事が始まる予定なので二、三ヶ月は休会止むを得ずとのことでした。

・溜めおきし戦争の澱はき出しこの世去りゆく大正世代

松本 啓子

少しむずかしい歌と思いましたが作者弁で味わい深い歌と

一同納得。

千葉支部

支部長／原田 寛

(八代記)

日時 8月22日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

司会 森 五貴雄

出席 16名 出詠 15首

8月15日の予定を一週延ばしての例会、体にまつわりつくような蒸し暑さでした。

千葉での全国大会が、琴、オカリナ、書等のかかれた才能を發揮し、無事盛会に終わることが出来たお話がありました。10月に岐阜で紅葉を愛でながらの吟行会について、参加呼びかけの案内がありました。歌会は、真摯な意見交換で進められました。

ことに、自分の気持を素直に出す短歌こそ短歌ならではの素晴しさ……の意見に、改めて皆が同感し奮い立つ思いでした。高点歌と添削後を書きます。

・屈伸も徒歩も叶わずなにをなす洗面鏡のわが身に問いし
屈伸も徒歩も叶わずなにすや洗面鏡のわが身に問いぬ

堀井 英範

・涼やかな風鈴の音がとろとろと微睡み誘う里の縁側
涼やかな風鈴の音にとろとろと微睡み誘う里の縁側

上田 やい子

・今日もまた極り文句で娘に電話「ひとり身されど日々事も無し」

今日もまた極り文句で娘に電話 ひとり身されど日々事も無し

小貫 昭

・帰省の日子らの好物取りそろえ料理上手な亡父恋し益

帰省せし子らの好物とりそろえ料理上手な亡父恋し益

富原 澄枝

大田支部 支部長／庄司 久恵

(庄司記)

日時 7月27日(月) 13時～16時30分

場所 大森山王高齢者センター

司会 庄司 久恵

出席 9名 出詠 9首

夏季大会に欠席の長沼温代さんへの「特別賞」をご出講の三木先生より手渡しして頂き、長い間の会員であり、遠路支部会出席の長沼さんを拍手を以ってお祝いました。本日も熱心で実りある会であった。

・「夜の蜘蛛盗人に注意」 わぎもこの和歌とは違ふ母のいま
しめ 川村 貴美

大田支部 支部長／庄司 久恵 (山名記)

日時 8月24日(月)

場所 大森山王高齢者センター

司会 山名 恒子

出席 8名 出詠 8首

孟蘭盆会の月のため、また療養中の方もあり、少し淋しい
会でしたが、作者の気持と出来上った歌とに乖離はないか、
表現方法がいいのか、を丁寧に批評し合いました。

長沼さんの歌「蟬数多短き命道の辺に雨注ぎをり骸なる上」
を皆で議論した結果「蟬数多むくろなる上やはらかに雨注ぎ
をり短き命」となりました。

月の船支部 支部長／川村 貴美 (相羽記)

日時 9月10日(木) 13時～16時

場所 中央生涯学習センター三階

出席 6名 出詠 6首

司会 伊藤 モト

月の船が宇都宮市で歌会を開いたのは初めてで、伊藤会員
のお骨折による貴重な顔合せになりました。和やかな挨拶の
のち優しく厳しい勉強会になりました。自分で理解して書く、
ことばの羅列だけでは…。上句で解ってしまうようでは駄目、
結句で勝負する。とか、場所の設定もしっかりして難なし。
とか…。楽しい歌会になりました。名人揃い選歌なし。

一部屋に病臥して二十年、アララギの歌人倉井彌太郎氏の
歌集が配布されました。

・堀沿いに葛の葉びっしりはびこりて甘き香りの漂いており

伊藤 モト

・ボンボンと目映き朝に生まれたる人の一生蓮の如しか

狐塚 秀子

掲示板

七月二十日(月)に開催された「第二回環八郎潟短歌大会」
において秋田八郎潟支部の次の二名の会員が講師選に入賞さ
れました。

小林 絢子

人住まぬ家に盛れる赤き薔薇「売物件」の文字隠しつつ

土橋 茂徳

見透しのせせらぎ公園幼らがけふも流るるおと踏み遊ぶ
まことにおめでとうございました。拍手をお送りします。

お知らせ

「太陽の舟」は本年十二月号で創刊三百号を迎えます。記
念号特集をいたします。「三百号に寄せて」など思い出や将
来にむけての希望または「私の歌論」などエッセイを募集し
ます。字数は六〇〇字(26×24行)程度とします。奮ってご
応募下さい。お待ちしております。

——編集部

十月一日より「短歌の太陽の舟」のホームページが開設
されます。「短歌の太陽の舟」では是非開いて下さい。

お詫びと訂正 九月号

十五頁上段十九行目 動かす↓動かす

三十頁上段 四行目 倒れ ↓傾れ